

Title	異端審問制度と宮廷劇作家Gil Vicente
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪外国語大学学報. 74(1-2) p.87-p.96
Issue Date	1987-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81155
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「異端審問制度と宮廷劇作家 Gil Vicente」

A Inquisição e Gil Vicente

ポルトガル・ブラジル語学科

林 田 雅 至

A Inquisição «comprada» a Roma por D. João III (1536) tem a função de arma para a centralização do poder régio e para o controle por parte da Coroa. No seu estabelecimento, é claro, nota-se um objectivo real da espoliação das riquezas dos críticos-novos.

Por outro lado, é de salientar a existência do conceito de conversão à força contra o tradicional na Inquisição Medieval em que os judeus não estavam sujeitos ao primeiro conceito. Gil Vicente, através de algumas das suas obras, defende os judeus, baseando-se no princípio da Igreja Medieval.

I 異端審問制度と強制概念

1.1 1497年、ドン・マヌエル1世（在位1495-1521）によるユダヤ人強制改宗は、カスティリヤのイザベルとの結婚条件《ユダヤ人のポルトガル王国よりの追放》を満足させただけでなく、高額納税者・信用経済の担い手（商業・貿易・医者・弁護士等）であるユダヤ人国内在住を可能ならしめたのである⁽¹⁾

同年5月、新キリスト教徒（＝改宗ユダヤ人）⁽²⁾の宗教上の問題についてはむこう20年間詮議立てしないこととし、1512年、'18年に終了するこの期限を16年間延長している（1533年まで）⁽³⁾ また、1507年には、新キリスト教徒に関する唯一の法律上の区別であった国外移動禁止令も廃止され、新キリスト教徒といわゆるカトリック教徒との区別は全くなくなるのである⁽⁴⁾

1.2 ところが、この2法令を国王自らが犯すのである。1515年8月26日、教皇庁に対して、異端審問制度設立申請をローマ大使ドン・ミゲル・ダ・シルヴァに命ずる⁽⁵⁾

国王の挙げた根拠は、「カスティリヤで異端（＝改宗ユダヤ人が、ユダヤ教に復帰すること）として異端審問に迫害されたユダヤ人がポルトガルに亡命し、(...) よきキリスト教徒として信仰の純潔を守らない。彼らのみならず、ポルトガルの新キリスト教徒もまた取調べの上、然るべき刑罰を受ける必要がある [() は林田が補足した]」⁽⁶⁾ というものである。カスティリヤで、1480年以來行われていたユダヤ人の異端を口実としての財産没収⁽⁷⁾を当然知っていたはずの国王が、偶然にせよ、用意されている1497年強制改宗者（当時2万の在住ユダヤ人のうち改宗に抵抗したものはわずか7, 8人に過ぎなかった）⁽⁸⁾を眼前にして、何らの策を思いつかなかったはずはない。

注意しなければならないことは、申請の根拠に、《強制》という言葉が見当たらないことである。

1.3 中世カトリック教会は、「如何なる方法であっても、何人に対しても、強制的に我が信仰の秘跡を受けさせるのは合法的ではない」⁽⁹⁾とし、「自分の宗教（ユダヤ教）を忠実に守っているユダヤ人に対して（...）なんら干渉せず、生活や権利を脅かすことなどできなかったということである。それどころか、（...）キリスト教徒に対し、ユダヤ人の自由を尊重するようにと要求していた」⁽¹⁰⁾

国王も、強制改宗がマイナス符号であることは、既に承知のことであり、一方、強制的に改宗させられたユダヤ人も上記中世の慣例から判断して、ユダヤ教に復帰したのを容易に想像できる（この行為は宗教的に罪ではなかったのであるから）⁽¹¹⁾

従って、この《強制》という言葉を隠蔽しておけば、中世異端審問制度の原則——中世社会において、ユダヤ人のキリスト教徒たる道は、その自発性に依存するしかないのである。一方、またそれ故にこそ、一旦自発的にキリスト教に改宗したものがユダヤ教に復帰した場合、彼らは厳罰に処された。ある者は火刑に処された⁽¹²⁾——に基き、強制改宗ユダヤ人を厳罰に処し、カスティリャに倣って財産没収を行うことができると、国王は考えたのではないか。ローマ教皇もその裏の意味を悟ったのであろう。制度申請を退けている。以後、ドン・マヌエル国王側からその在位中申請は一切行われていない⁽¹³⁾

1.4 次代国王ドン・ジョアン3世（在位1521-1557）の'31年4月教皇クレメンス7世への制度設立請願を皮切りに、6年越しの教皇・国王間交渉が始まる⁽¹⁴⁾

第1回申請で、国王は強制改宗に言及せず、新キリスト教徒のユダヤ教復帰を指摘する⁽¹⁵⁾

この直後、「その祖国の信仰に立ち帰るために、ポルトガルからトルコに逃れた新キリスト教徒ディオゴ・ピレス（...）は、ローマに行き、強制改宗を迫られ、キリスト教徒たる宣言を行なうことを強要されたが、そうはしなかった、と告白した」⁽¹⁶⁾という事件が生じている。これは、彼が、1497年強制改宗者であり、中世カトリック概念に則り、ユダヤ教に復帰しようとした際、新たに強制改宗・受礼を受けたが、従わなかった、と言うものであろう。

1532年6月14日、国王は法令を發布する。

国外移動禁止令。しかも、財産売却・移動も禁じ、一切の商業活動を1497年以降のキリスト教改宗者（＝1497年強制改宗者を含む新キリスト教徒）に停止せしめたのである。そして、以上の禁令を破る者には、死罪・財産没収刑が課されたのである⁽¹⁷⁾。改宗ユダヤ人にとっては死活問題である。

ユダヤ人迫害を行うカスティリャ及び制度設立に動き出したポルトガルを目のあたりにした改宗ユダヤ人が国外退去（1507年に認可されている）を始めていることを予測させる法令である⁽¹⁸⁾

また、強制改宗者を含む新キリスト教徒を生贄とする財産没収が、今や制度の目的であることをポルトガル国王が明らかにした法令である。

教皇側は、《強制》という概念を嫌忌し⁽¹⁹⁾、交渉は真っ向から対立する。

1.5 解決の糸口を掴んだのは、イタリア領有問題でフランスと対立し、1527年にはローマ掠奪を行い、またトルコの威嚇にさらされていた教皇が頼らざるを得なかった皇帝カルロス5世である。

「ポルトガル大使ドン・エンリケ・デ・メネーゼスは生まれて初めて、'35年12月26日ナポリで皇帝と会見した。皇帝は、彼に既に以前カスティリヤ宮廷付ポルトガル大使アルヴァロ・メンデス・デ・ヴァスコンセロスに述べたこと、即ち、自分の甥ドン・ジョアン3世の諸要求を満足させるために必要なできる限りのことをし、(...)交渉は成立している、と繰り返し述べた」⁽²⁰⁾

1536年5月23日、制度許可の大勅書 Cum ad nihil magis が発布される。《強制》という概念は、実質的に認められることになるのである⁽²¹⁾

1.6 ところで、'31年から'36年までポルトガル国王は、異端審問制度設立に関する交渉をメインに据える教皇との諸交渉に10万クルザードの臨時出費をしている⁽²²⁾ (cf. '24年インド軍備強化のため、ヴァスコ・ダ・ガマ、兵2700名を連れインド航行：20万クルザード)⁽²³⁾

1534年4月9日小勅書 Ex litterarum exemplo の中で、「教皇特派使節は (...)、大勅書 (1533年4月7日大勅書 Sempiterno Regi) 執行のためには、いかなる賄賂も受け取ってはならない。たとえ、それがポルトガル側から進んで差し出されたものであったとしても、収賄は厳罰に処する」⁽²⁴⁾としている。それ故に、「異端審問制度設立に反対するすべての措置は、新キリスト教徒により教皇庁に蓄えられた巨額の賄賂のためであるという噂がポルトガルで立っている」⁽²⁵⁾ということが、まんざら噂でないように思える。

結局、教皇側は交渉を遅滞させ、新キリスト教徒からも、またポルトガル国王からも賄賂を受け取り、私腹を肥やそうとしたのではないか。

だからこそ、教皇はカスティリヤで国家機関化した異端審問制度による、改宗ユダヤ人の異端を口実にした財産没収刑を決して忘れなかった⁽²⁶⁾。制度が国家機関化すれば、ユダヤの富は失われてしまう。

「キリスト教徒にとっては不浄の行為とみなされていた金融業 (...)に従事させることで、けっこう持ちつ持たれつの関係を維持させていた」⁽²⁷⁾ 教皇にとって、ユダヤの富を失うことは大きな損失であった。

それ故に、ユダヤ人に対する寛大さ (=強制改宗への反対) を持ち出して制度設立申請を退け、中世的世界を維持しようとした、という読みも可能である。

II 異端審問制度＝政治的世界の鎮魂術

2.1 以上のように、カトリック教会のユダヤ人に対する寛大の概念は、経済的概念と関係付けられるばかりではない。

ユダヤ人は、「それぞれの国で、その周辺や片隅に空間を求めてそこに生活していた。みんな社会の中にあると同時に、よそ者であった。みんな社会に属していながらその社会にはうけいれられ

ていない」⁽²⁸⁾ 従って、彼らは境界性という性格を帯びざるを得ない。

一方、「カトリック教会も、悪魔だけで満足しているわけではないではないか。彼らとて、戦意を喪失しないためには、はっきりと目に見える敵を必要とするのである (...)」⁽²⁹⁾ 「我ら」のアイデンティティが確認されるために、「彼ら」は必要なのであり、彼らはそういった意味で有用なのである。キリスト教社会がゲッターを必要とした文化的前提はここにある。(…) 中世西欧のユダヤ人はキリスト教社会の周縁に位置する集団であった。ユダヤ人は「我ら」とともに、「彼ら」である」⁽³⁰⁾ 「ユダヤ人は存在していたのではなく、存在させられていたのである」⁽³¹⁾

ここまで見てくれば、我々は「犠牲の論理」⁽³²⁾に思い当たるはずである。

政治的世界にあっては、次のことが行なわれるのである。世界にとって「悪の象徴というべきもの」「隠れた不吉な力」「腫れ物」「はたもの」「エキセントリックな非日常的存在」「否定的な存在」「文化の中の挑発的な部分」「周縁」「境界」「反秩序のマイナス記号を付された生贄（ヴィクティム）」が、時と場所を限定して、選び出され、顕在化・視覚化・強調され、飾り立てられ、「日常生活に集積された諸人の煩い」「日常世界の汚染」「共同体の罪と穢れ」「負のエントロピー」を吸収させられ、破壊される。そして、そうすることによって、世界は浄化され、また秩序は確証されるのである（政治的世界の鎮魂術＝神話及び象徴に内在する究極的論理）⁽³³⁾

2.2 中世異端審問制度において、自発的な改宗ユダヤ人が、ユダヤ教に復帰した場合、教会が厳罰に処したというのは、周縁的記号を持つユダヤ人が、ユダヤ教に復帰することにより生まれる罪（キリスト教徒が、信仰に反旗を翻すのと同義）に起因する社会危機＝負のエントロピーを切り抜けるためには、彼らが贖罪の山羊として葬られない限り、カタルシス或いは救いがもたらされることはない、という意味である。

こうしてみると、次の一節も老練な為政者の言葉ということになろう。「教会並びに君主は、ユダヤ人が我が主イエス・キリストを磔刑に処した者の末裔であるという記憶を保っておくために、彼らを永遠の鎖に繋ぎ、キリスト教徒の内生活するのを許可している」⁽³⁴⁾

2.3 それでは、認められた《強制》概念は、ポルトガルにおいて如何なる政治的な意味を有するのであろうか。

境界性（マージナリティ）こそふさわしいユダヤ人が、キリスト教化させられる、つまり中心記号を付されてしまうのは、中世的秩序が確証されるためには、好ましからぬことである。絶えざる記号の増殖作用の故に、中心部分を生氣づけているユダヤ人を失うことになるからである（中世異端審問制度のユダヤ人に対する寛大さ及び、自発的改宗者がユダヤ教に復帰した場合の厳罰がその意味を失ってしまう）。

《強制》概念は中世的な意味では異質なものであり、強制改宗ユダヤ人は、その本性と共に中世的慣例からユダヤ教に復帰したはずである。ところが今や強制改宗が、正当化されたのである⁽³⁵⁾

従って、強制的に改宗させられたユダヤ人が、ユダヤ教に復帰することにより罪が生まれることになるのであるから、これに対応する儀礼的に完全な生贄が贖いとして供えられる必要性が生じて

くるのである。

中世異端審問制度的見地と、それとは異なるポルトガルのそれとの狭間に立たされた強制改宗ユダヤ人の心理的動揺（旧価値感への固執）を利用した制度である。

この時期は、公債の発行⁽³⁶⁾と共に中世世界が崩壊し、それに続いて絶対王権の確立する時期である。いわゆる社会の転換期を迎えているのである。

《強制》という記号自体が、転換期に相応しいといえよう。従って、ユダヤ教復帰に対する制裁＝生贄の儀式も、中世にあっては、その社会の秩序を維持するためのものであったのに対し、この時期にあたっては、新しい絶対王権を確立するためのものであると言えるかもしれない。

Ⅲ 宮廷劇作家 Gil Vicente と異端審問制度

3.1 宮廷劇作家として当時ヨーロッパに比肩し得る者のなかった⁽³⁷⁾ ジル・ヴィセンテ（1465? -1536?）は、国王の政治的世界の鎮魂術＝異端審問制度を如何に考えていたであろうか。

1497年ドン・マヌエル1世の強制改宗に異議を唱える⁽³⁸⁾。

心からキリスト教徒であるように徒らにユダヤ人に請う⁽³⁹⁾

強制改宗に対する否定の態度が、ユダヤ人のキリスト復活に対する不信感によって示されている『復活に関する対話』⁽⁴⁰⁾では、2人のラビが律法的にはキリストの復活を信ずるものの、やはり次のような結末になってしまっている。

ラビ)

我々は沈黙しているのがよからう。

あ奴が復活したと言おうとする者を私は黙らせてしまおう、

沈黙し、復活を否定し、シナゴグに参与しておくのが真実の道であろう (...) ⁽⁴¹⁾

1531年と言えば、ドン・ジョアン3世により交渉が再開された年であるが、この年の1月26日ポルトガルで地震が発生する。人々は、これは神の怒りであって、その原因は新キリスト教徒が国内に在住していることにありと信じ、彼らを攻撃する⁽⁴²⁾。そのことに関して、ジル・ヴィセンテは、「私は結論として、我々が驚嘆致しましたこの度の地震は神の怒りではなくて、建造物の損害を引き起こす自然力の憤りという形で主なる神の慈悲が下ったものと申し上げます。このことが、確固としたものでないとすれば、私を火刑⁽⁴³⁾に処していただきたいと思っております」⁽⁴⁴⁾

「我々の宗教の中で、今なおよそ者であって、しかも受け入れられていない者（＝新キリスト教徒）が、何人かいるとしても、次のように考えるべきではないでしょうか。つまり、我が国では宗教熱が余りに高揚しているばかりに、偶然にも生じた事態であって、神はそのことに満悦しておられる、という具合にであります」⁽⁴⁵⁾

ジル・ヴィセンテは、'31年に始まる交渉に先んじて強制改宗が、中世カトリック教会概念では、誤謬であることを示そうとしたのではないか。

3.2 こうした前提の下に、次の聖餐神秘劇をどのように解釈したらよいであろうか。

『神の歴史の聖餐神秘劇』⁽⁴⁶⁾ (1526年、1527年、1528年いずれかの年が上演年)

アダム、エバを始め、聖ヨハネまでが地獄王＝悪魔（ルシーフェル、ベリアル、サタン）の囿圖に繋れてしまう。そこへ、イエスが登場。荒野の試みを模した、悪魔の傍若無人な振舞い。冒瀆行為の繰り返し。イエスはゴルゴダの丘で受難。復活して、捕われの者らを解き放つ。全きキリスト教的ハッピー・エンディングの幕切れとなっている。

原罪観念の上に成立しているキリスト教は、イエスを贖罪の山羊と見做す救済宗教であり、否定的存在を媒介として確証される象徴の究極的論理が、内在していると考えられる。

この戯曲自体、次のように解釈されよう。

地上の処女を母として生まれた父なる神の子という、2つの世界に相渉る両義的存在者イエスが、地上に遍く平和をもたらすためには、まず市外の晒台で荊の冠を被せられ、偽王（モック・キング）として死ななければならない。もちろん、カーニバルの偽王戴冠・王位剥奪の儀式に不可欠のアルレッキーノたち（悪魔）は登場している。偽王として死んだイエスが、待望の救世主（キリスト）として復活し、地獄王どもを追放し、獄舎に繋れていた者らを解放する。そして地上の平和はここに完遂するのである⁽⁴⁷⁾

3.3 絶対王権が創成されつつある時期にあたり、ジル・ヴィセンテ自身、一方では直接的・宗教的にキリストの受難・復活を語り、他方ではその内面的な世界の中で、いわゆる政治的世界の鎮魂術、つまり「犠牲の論理」を感得し、中世の世界観から、それを演劇的に示そうとしたのではないか。

3.4 ところで、イギリスにあって100年戦争が終結する際、無学文盲の単純な一介の《羊飼の娘》、《百姓娘》、しかし利発で、決断力に富み、熱烈な感じやすい心の持ち主⁽⁴⁸⁾ ジャンヌ・ダルクは、「選ばれた女性」⁽⁴⁹⁾ 「天の遣わされたヒロイン」⁽⁵⁰⁾つまり「神の御使い」⁽⁵¹⁾であり、「主禱文と聖母祝詞と、使徒信経（...）以外は知」⁽⁵²⁾らず、「範とするにたる信心と非のうちのどころのない素行の持ち主」⁽⁵³⁾ 「こと信仰にかんしては誤りに陥いたためしのないこと、つねに信心深く善良なカトリック教徒」⁽⁵⁴⁾であったが、「モシモソノ状態ニイナケレバ、神様ガソコニ置イテクダサイマスヨウニ、モシ私ガソコニイルナラ、イツマデモイラレルヨウニシテ下サイマスヨウニ」⁽⁵⁵⁾という彼女の言葉をカトリック教会は、教会の仲立ちなしに直接神と通じていると解釈し、「許しがたい傲慢」⁽⁵⁶⁾と断じたのである。「向う見ずな彼女の勇氣」⁽⁵⁷⁾ 「千軍万軍の騎士」⁽⁵⁸⁾ 「練達の騎士」⁽⁵⁹⁾という記号を持つ「女戦士」⁽⁶⁰⁾は、「陣中ト宮中トヲ問ワズ騎士ノゴトキ出立チデアッタメ、サスガノ強者ドモモ、イタク驚キ、カツ立腹シタ」⁽⁶¹⁾のであり、さらに「カトリックは女が男の服装を身につけることを、嚴重に禁じていた」⁽⁶²⁾のである。

「ジャンヌは自分では知らなかったはずだが、その行動は、カトリック教会と貴族制とを二つの軸にする中世の枠を、すでに逸脱していたのである。その意味では、まさに彼女は異端的だった」⁽⁶³⁾

実際、「尋常ナラザルモノ」⁽⁶⁴⁾ 「身持ち修ラヌ女、魔女、偶像崇拜ノ異端ノ女」⁽⁶⁵⁾ 「超自然の乙女」⁽⁶⁶⁾として、殉教させられる⁽⁶⁷⁾。

ジャンヌ・ダルクこそ、象徴論的に中世世界の崩壊・絶対主義確立＝エリザベス1世治世、を準備した否定的存在であったといえる。

3.5 王権が持つ「犠牲の論理」の可能性を特に『ヘンリー4世』第1部、第2部において示すことができたシェイクスピア⁽⁶⁸⁾は、以上の歴史的経緯を神話論的次元で把握していたに違いない。

絶対主義という同じ政治形態の確立期に生きた両劇作家とも、カーニバル的・教会劇の伝統に支えられて、歴史・王権の「犠牲の論理」を舞台芸能に投射することができたと言えよう。ここに平行関係が成立している。

ポルトガル異端審問制度が、絶対主義確立の生贄の儀式であるとすれば、ジル・ヴィセンテは、中世的思考の下に『神の歴史の聖餐神秘劇』によって極めて文学的にナイーブに制度設立を非難したと言えるのではないか。しかも「汝らに聖アウグスティヌスの『神の国』等の思弁は言いたくはなく、ドゥンス・スコトゥスを一字義たりとも申そうとは思わぬ、(...) 思弁の秘密を等閑に」⁽⁶⁹⁾するといった語り口を旨としている以上、つまり聖アウグスティヌス、ドゥンス・スコトゥスを槍玉に挙げながら、中世末期の硬直化したスコラ思想非難の態度を骨の髄までに浸透させている以上、彼を《宮廷道化》と名付けてよい筈である。

社会秩序	⇔	否定的存在
ポルトガル		イギリス
絶対王権⇔強制改宗ユダヤ人		絶対王権⇔ジャンヌ・ダルク
『神の歴史の聖餐神秘劇』		『ヘンリー4世』第1部・第2部
キリスト教徒⇔イエス・キリスト		ヘンリー5世 (前ハル王子)⇔ファルスタッフ

[註]

- (1) Damião Peres 監修, História de Portugal, Barcelos, 1928-37, vol. III., p. 222., in 松尾多希子「近世ポルトガル異端審問制度の起源と成立に関する試論」, 1967, 〈東外大論集 16〉 p. 102.
- (2) 新キリスト教徒 (cristãos-novos) とは gente de nação, conversos, marranos と呼ばれ, ユダヤ教を捨てキリスト教に改宗した者の一般的呼称で, 教会法はキリスト教改宗者から7代までを新キリスト教徒として取り扱った。それ故に, 強制改宗者も含むのである。
- (3) Damião Peres, op. cit., p. 222., in 松尾多希子, 同論文, p. 102.
- (4) D. Peres, op. cit., p. 228., in 松尾多希子, 同論文, p. 103.
- (5) Fortunato de Almeida, História da Igreja em Portugal, Coimbra, 1910., T. III. p. II., p.184.
- (6) ibid., p. 184.
- (7) ギー・テスタス, ジャン・テスタス, 安斎和雄訳『異端審問』, 白水社, 1973., p. 83-85

- (8) D. Peres, op. cit., p. 222. in 松尾多希子, 同論文, p. 102.
- (9) Frei Amador Arrais, Dialogos, Lisboa, 1944., p.26.
- (10) ギー・テストス, ジャン・テストス, 前掲書, p. 65.
- (11) 同上, p. 65.
- (12) 同上, p. 65.
- (13) F.de Almeida, op. cit., p. 186.
- (14) ibid., p. 190-238.
- (15) ibid., p. 190.
- (16) ibid., p. 193.
- (17) ibid., p. 197-98.
- (18) ibid., p. 197.
- (19) ibid., p. 200-01.
- (20) ibid., p. 233-34.
- (21) ibid., p. 235.
- (22) Vitorino Magalhães Godinho, Finanças Públicas e Estrutura do Estado., in Joel Serrão, Dicionário de História de Portugal, Rio de Janeiro., 1963. F 項., p. 260.
- (23) J. Serrão, op. cit., p. 260 ; F. Luís de Sousa, Anais de D. João III, Lisboa, 1954, p. 272-73.
- (24) F. de Almeida, op. cit., p. 215. ここに述べられている大勅書は、教皇側の主張、つまり、強制改宗及び財産没収刑の反対を含む (F. de Almeida, op. cit., p. 200-04.)。
- (25) ibid., p. 209.
- (26) ibid., p. 186, p. 219.
- (27) 安部公房『内なる刃境』, 中央公論社, 1975, p. 62.
- (28) I. ドイチャー, 鈴木一郎訳『非ユダヤ的ユダヤ人』, 岩波書店, 1970, p. 35.
- (29) ヘルマン・ラウシュニング, 船戸満之訳『ヒトラーとの対話』, 学芸書林, 1972, p. 269.
- (30) 山口昌男『文化と両義性』, 岩波書店, 1975, p. 82.
- (31) 安部公房, 前掲書, p. 77.
- (32) これは, 山口昌男『歴史・祝祭・神話』, 中央公論社, 1987, 「第一部 鎮魂と犠牲」の「犠牲の論理ーヒトラー, ユダヤ人」からの借用。
- (33) この一節は, ケネス・パークの歴史理論, 「原罪」の観念が存在するならば, 象徴の究極的論理のしからしむところによって, その罪のかたちに対応する「儀礼的に完全に生贄」を賸いとして供えなければならない, というのが原罪に対応する「規範」である (山口昌男『歴史・祝祭・神話』, p. 87-88.) を基にして, 山口昌男, 前掲2書及び『本の神話学』, 中央公論社, 1977. 『道化の民俗学』, 新潮社, 1975. 『道化的世界』, 筑摩書房, 1975. を主として参考にし, 整理した。
- (34) スペイン賢王アルフォンソ10世 (在位1252-84) の『7部法典』(1256-63, 5) に見える。A. José Saraiva, Inquisição e Cristãos-Novos, Porto, 1969, p. 35.

- (35) F. Amador Arrais, op. cit., p. 26. 参照。
- (36) 確定公債が, 1500年より, 流動公債が, 1522年より発布される。ポルトガルの官僚化が固められていく (J. Serrão, op. cit., p. 255-56.)。
- (37) Menéndez y Pelayo, *Antologia de los poetas liricos catellanos*, VII, p. CLXV., in Gil Vicente, *Obras Completeas*, Lisboa, 1974 (5版), vol. I, p. X.
- (38) Joaquim de Carvalho, *«Os Sermões de Gil Vicente e a Arte de Pregar»*, Lisboa, 1948, p. 17; Teófilo Braga, *«Gil Vicente e as origens do Teatro Nacional»*, Porto, 1898, p. 325.
- (39) Gil Vicente, *Hua pregação feyta em Abrantes ao nascimento do iffante dom Luis*, in *Obras Completas de Gil Vicente*, Reimpressão *«Fac-Similada»* da Edição de 1562, Lisboa, 1928, fol. CCLI-CCLIII.
- (40) G. Vicente, *Dialogos de hús ludeus & Centurios sobre a ressureyçam de Christo*, in *Obras Completas de G. Vicente*, Lisboa, 1928, fol. LXXV—LXXIX.
- (41) *Obras Completas de G. Vicente*, Lisboa, 1928, fol. LXXV III^V.
- (42) Gil Vicente, *Carta q o autor escreueo a elRey sobre o tremor da terra*, in *Obras Completas de G. Vicente*, Lisboa, 1928, fol. CCL VII—CCL VIII.
- (43) 火刑とは異端刑であり, ジル・ヴィセンテは身の危険を顧みずに強弁しているのである。cf. 「ラブレールは, その作品中でたびたび「...であることを断言する, たとえ火刑にあってもとは申さぬが」(jusques au feu exclusive) というような奇妙な語句を使っています」(渡辺一夫『ヒューマニズム考』, 講談社, 1973, p. 95.)。
- (44) *Obras Completas de G. Vicente*, Lisboa, 1928, fol. CCLV II^V.
- (45) *ibid.*, fol. CCLV III.
- (46) *ibid.*, fol. LXI—LXXV.
- (47) キリストを道化と捉える観点は次の書による。Harvey Cox, *Feast of Fools: A Theological Essay on Festivity and Fantasy*, Cambridge, Mass. 1969.
- (48) 村松 剛『ジャンヌ・ダルク』, 中央公論社, 1967, p. 163; アンドレ・ボシュア, 新倉俊一訳『ジャンヌ・ダルク』, 白水社, 1969, p. 12, 39, 75, 126.
- (49) 村松 剛, 前掲書, p. 186.
- (50) アンドレ・ボシュア, 前掲書, p. 74.
- (51) 村松 剛, 同書, p. 128.
- (52) アンドレ・ボシュア, 同書, p. 15.
- (53) 同上, p. 35.
- (54) 同上, p. 120.
- (55) 同上, p. 85. カタカナはフランス古語を示す。
- (56) 村松 剛, 同書, p. 157.
- (57) 同上, p. 110.
- (58) 同上, p. 98.

- (59)同上, p. 108.
- (60)アンドレ・ボシュア, 同書, p. 126.
- (61)同上, p. 44-45. (54)を見よ
- (62)村松 剛, 同書, p. 53.
- (63)同上, p. 157.
- (64)アンドレ・ボシュア, 同書, p. 47. (54)を見よ
- (65)同上, p. 103. (54)を見よ
- (66)同上, p. 127.
- (67)ファルコネッティの好演だけでなく, 大胆なクローズ・アップの連続, 正確な構図とモンタージュにより知られるカール・テホ・ドライヤー監督『裁かるるジャンヌ・ダルク (La passion de Jeanne d'Arc)』(1928年)では, ジャンヌ・ダルクは, ゴルゴダの丘で受難するイエスとして, 火刑に処されている。
- (68)山口昌男『道化的世界』, p. 347-48.
- (69) Gil Vicente, *Hua pregação feyta em Abrantes*, in *Obras Completas de G. Vicente*, Lisboa, 1928, fol. CCL II.